南富、猛暑の夏　農作物は・・・

七月。初旬のストーブをつけるほどの寒さから一転、夏休み突入に合わせるかのように、北海道を猛暑が襲ってきた。南富良野町でも太陽がちりちりと長時間照りつけ、雨の降る日が少ない天気が続いた。町では、節水が宣言される一歩手前の状態と言われた時期もあった。

金山湖も、湖水が少ないためなのか、湖畔から岸辺までの距離が普段より遠くなってしまっている様子だ。そのため、中学校では、恒例行事である「カヌー授業」が、やむなく中止の事態となった。

そんな中、家庭で農業を営んでいるという生徒から「農作物の実りが例年と比べて良くない」「除草剤をまくための水が足りない」と聞いた。だが、農家とは別のルートからは「出荷量は例年と特に変わらない。」という話も聞こえてきた。

南富良野町内の農家の作物は本当に猛暑の被害にあったのだろうか。被害の規模や内容はどんなものなのだろうか。素朴な疑問がわいた。そこで町内の幾寅、北落合、下金山の三地区の農家の方に質問紙による調査を実施することにした。

結果、各地区の農家八戸から回答が得られた。その内容を見ると、農作物に深刻な影響があった農家とそうでない農家の二つに分かれた。

「影響があった」と答えた農家は、四戸（幾寅三戸・下金山一戸）。影響については、人参の形状の悪化、短根化、じゃがいも・カボチャのなり方が少ない・麦の実入りが悪い、植えた苗が枯れてしまい植え直した、などがあげられていた。また、このような影響の原因を、農家の方は、雨が少なかったこと、気温が高い日が続いたこと、土地の土の成分の違いと考えているようだった。そこで、今年の幾寅の気温・降水量・日照時間について、気象庁のデータから調べてみた。

気温は平年値と比べると七月が一・七度低く、六月と八月がそれぞれ二・八度、一・七度と高い。また、高すぎたり、低すぎたりと、気温の変動が激しかったことがわかる。

一方、降水量は、作物の成長期と思われる四月から八月の期間が、平年値は四百五十四ミリであるのに対して、今年は二百九十一ミリと、平年値の六十四パーセントにとどまった。特に七月と八月の降水量は平年値の半分以下。これは、作物の生育にとってマイナス要因である。

そして、日照時間は、六月から八月にかけて平年値よりも長かった。これは作物にとってはプラスの要因といえる。これらのデータと農作物への悪影響との関連性は、次のように考えられる。

降水量が少なかったことや、六月と八月の気温が高すぎたことは、貯水能力の低い畑の根菜作物が、土中の水分を求めて根を広げ、表面がでこぼこしたりなどの形状悪化につながった。また、カボチャの日焼けなどの影響も出た。

しかし、気温の高さ、降水量の少なさの影響もあまり受けなかった農家もあった。その要因としては、畑の土に貯水力があったり、潅水（かんすい）設備が整っていること、そうでなくても近くの川から水を汲んで散水したりなどの工夫を行っていることだ。また、一メートル土管を地下に埋めて土に少しでも水を貯めようと工夫をしている農家もあった。

このように、年ごとに変動する気温、降水量に対応するために、農家はいろいろな工夫を行っていることがわかった。また、今年の気温の高さ、降水量の少なさによる農作物への悪影響を反省材料に、土地の性質にあった工夫や関連団体による対策が求められるのかもしれない。

今年の猛暑は人間にとっても、植物にとっても過酷なものだった。農業に限らず、さまざまな方面での影響もあった。

「水の大切さ」。ニュースや学校の学習を通して、わかっているつもりではいた。

今夏の厳しさは、環境問題、温暖化などと言いながらも、どこか人ごとのつもりでいる、そんな我々に対する警告だったのかもしれない。

編集後記

この壁新聞のタイトル「ひなげし」は南富良野町の町花です。花言葉は「感謝。」

今回の制作を通して、私たちはふだん何気なく使っている水の大切さ、学校行事の思い出を毎年撮ってくれる地域の方の存在など、「ありがたいなぁ」と改めて感じることがたくさんありました。

また、のどかで平和な町に思えますが、問題に感じ、改善していかなければならないこともありました。

制作の過程は、どの場面も苦労の連続でしたが、特に、様々な事実を通して何を伝えるかという部分で悩みましたが、ここに何とか完成を見ることができました。突然の取材に快く応じてくださった方々と、最後までお読みいただいた皆様に心からの感謝を申し上げます。

□発行／南富良野町役場　編集／企画課 広報統計係　Tel.52-2115
□ホームページアドレス http://town.minamifurano.hokkaido.jp

古紙配合率100パーセントの再生紙を使用しています。